

川崎病軽度冠状動脈障害例に 対する抗血栓療法の必要性

多田羅勝義，伊藤けい子，草川三治
東京女子医科大学第二病院小児科

〈緒言〉

川崎病冠状動脈瘤に対する小児科的療法としては動脈瘤の閉塞防止のための抗血栓療法が主体となる。巨大動脈瘤の場合には抗血栓療法にもかかわらず閉塞することも多い。一方，拡張あるいは小動脈瘤といった程度の冠状動脈後遺症の場合 regress することも多いが，発病数年たって認められる時には将来そのまま冠状動脈後遺症として残る可能性が高い。従ってこのような症例にも長期間抗血栓療法が続けられてきたわけであるが，はたしてほんとうに必要なのであろうか。無期限に内服を続けなくてはならないということは患者にとっても家族にとってもたいへんな苦痛となる。もし中止できるものならばそれは患者サイドにとっても医療サイドにとってもまことにありがたい。そこで当科において軽度の冠状動脈障害を残しながら投薬を中止した症例について検討してみた。

〈対象〉

対象は当科において冠状動脈造影により拡張（小動脈瘤）を確認した後，抗血栓療法を中止した15例とした。拡張（小動脈瘤）の定義は厚生省研究班による冠状動脈障害の基準に従った。冠状動脈障害部位としては，右冠状動脈 segment 1の拡張（小動脈瘤）3例，segment 2の拡張（小動脈瘤）1例，左冠状動脈のいわゆる web type のもの10例，segment 5の拡張3例（うち2例は segment 1の拡張合併例）であった。

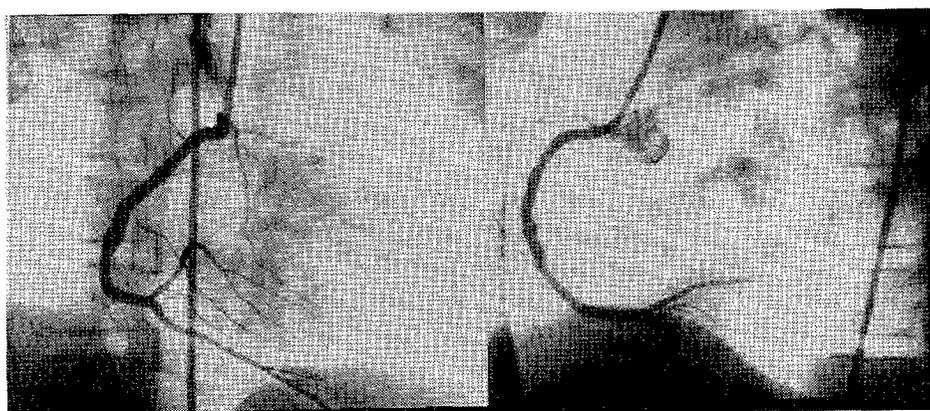
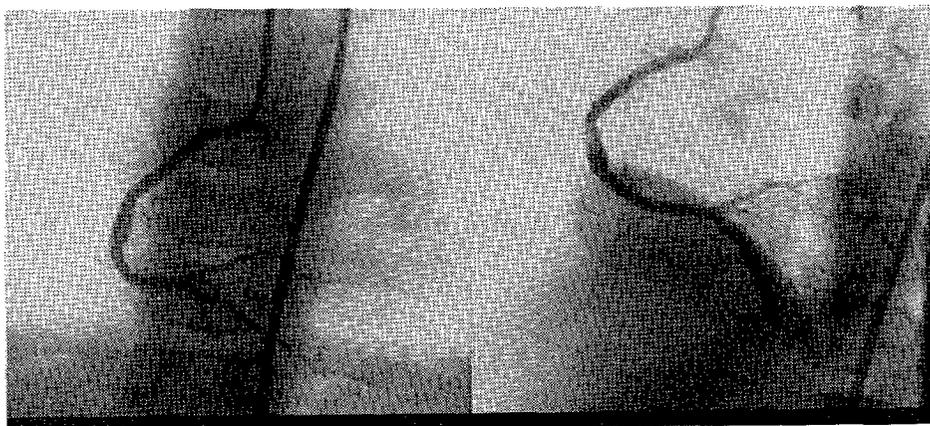
〈結果〉

投薬中止後再造影をおこなった症例は3例あったが，いずれも閉塞はみられず，拡張（小動脈瘤）はそのままであった。この3例の投薬中止から確認のための造影までの期間は3年，3年，5年であった。この3例を代表として以下に示した。

- 症例1. 昭和47年生。昭和51年発病。昭和55年，初回造影で segment 2 に小動脈瘤確認。患児はこの直後より自分で内服を中止した。昭和58年再造影，同様の小動脈瘤を確認した。（図1）
- 症例2. 昭和55年生。昭和57年発病。昭和58年初回造影で web type の動脈瘤を確認。主治医の判断により以後抗血栓療法中止。昭和61年再造影で同様の動脈瘤を確認した。（図2）
- 症例3. 昭和52年生。昭和53年発病。昭和56年再造影で segment 1, 5 に拡張（小動脈瘤）を確認，以後抗血栓療法を中止。昭和61年3回目の造影をおこない所見の変化なしを確認した。（図3）

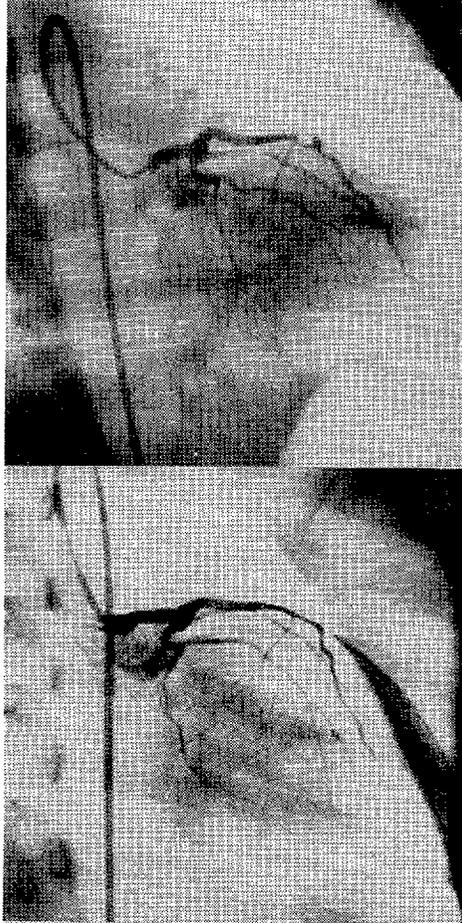
以上3例を含めた15例の投薬中止期間（61年12月末）は1年から6年（平均2.5年）であった。この間心筋梗塞等の臨床症状，心電図異常，断層心エコーによる左室壁運動異常を呈した症例はいなかった。

図 1.



症例 1. 上段, 初回造影像 (左 AP, 右 LAO 60) 下段, 再造影像 (左 RAO 30, 右 LAO 60)
初回造影後投棄が中止された。

図2.



症例2. 上段, 初回造影像 下段, 再造影像, 初回造影後投薬が中止された。

図3.

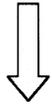


症例3. 再々造影 患児は再造影後投薬が中止された。

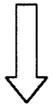
〈考 案〉

抗血栓療法の第一の目的はまず文字通り動脈瘤の血栓性閉塞の予防である。この点からみるかぎり、冠状動脈拡張（小動脈瘤）に対しては抗血栓療法を中止できる可能性があるのではないかと思われた。ただし、この場合造影所見としては動脈瘤の大きさだけではなく造影剤の排泄状態も重要なポイントとなろう。特に左冠状動脈のweb type の動脈瘤の場合は抗血栓療法の是非に関して再検討する必要があるだろう。

もちろんこのような冠状動脈障害が将来的に大いに問題に成り得るだろうことは予測できるので、今後とも十分な経過観察が必要なことはいうまでもない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



緒言

川崎病冠状動脈瘤に対する小児科的療法としては動脈瘤の閉塞防止のための抗血栓療法が主体となる。巨大動脈瘤の場合には抗血栓療法にもかかわらず閉塞することも多い。一方、拡張あるいは小動脈瘤といった程度の冠状動脈後遺症の場合 regress することも多いが、発病数年たって認められる時には将来そのまま冠状動脈後遺症として残る可能性が高い。従ってこのような症例にも長期間抗血栓療法が続けられてきたわけであるが、はたしてほんとうに必要なのであろうか。無期限に内服を続けなくてはならないということは患者にとっても家族にとってもたいへんな苦痛となる。もし中止できるものならばそれは患者サイドにとっても医療サイドにとってもまことにありがたい。そこで当科において軽度の冠状動脈障害を残しながら投薬を中止した症例について検討してみた。